

# S o l v a n g (ソルバング)

<精神疾患用生活ホーム>

P.I.C. : Ms. Anne Roeder

記録：中谷 稔

## ★はじめに

施設長のアンナさんをはじめ、4人の職員の皆さんに出迎えていただきました。

施設の説明をはじめる前に、アンナさんから改めて「1年に1回の訪問を楽しみにしていました。」と、私たちの訪問を歓迎するあたたかい言葉をいただきました。

アンナさんは、この施設に勤めはじめて10年目になるともおっしゃっていました。

現在、この施設には33名の入居者がおり、精神疾患やアルコールによる脳障害などいろいろな問題を抱えているということでした。

そして、アンナさんが詳しくお話をしてくださいました。

## ★精神障がい者に対する考え方

ここに入居している方々は、一般市民生活をする人たちと同じ家計をやっています。住宅供給会社と契約し家賃を払っています。

つまり、一般市民と権利や義務は同じということです。ここに入居しているということは、問題をもっているということです。その問題に対して、私たち職員は援助をしています。

まずはじめに、ここに住む一人ひとは「家長」です。だから、権利(人権)を尊重します。つまり、ここに住む人たちの生活を尊重し自由に生活できるように援助しています。一人ひとりの尊厳と倫理を大切にしています。

## ★精神障がい者の「自立」とは



<ソルバングの周りは緑がいっぱい>

1990年ころまでは施設があり、入居者の会計は自治体が管理しておりお小遣いが支給されていました。つまり、施設がその人の人生を決めていたということです。

しかし、その後「住居」思想に変わり今のようにになりました。年金も含めて会計は自己管理するようになりました。彼らの問題解決を援助するという考え方に変わったのです。

施設だった当時は、トイレやシャワーなどは外にあり、多くの規制がありました。しかし、今はモダンなソルバングになりました。

スタッフにやってもらう、スタッフがやってあげるといった考え方(昔の概念)から、自分では自分でやる、自分でできることは自分でやってくださいね、というお互いに「自立」の考え方を変える時期があり、今に至っています。

人としての尊厳を認めるという考え方に変わってきたということです。

## ★質問タイム

Q 1 : 入居者の方たちの年齢は？

A 1 : 30 才～83 才です。

Q 2 : 仕事をしたいという要求があったらどうしますか？

A 2 : ここに入居している方は、いろいろな在宅ケアや授産施設で生活してきましたが、それが叶わなくなってここに来ています。

Q 3 : ここに勤務している方的人数(最大人数)は何人ですか？

A 3 : 1 グループ、最低でも 2 名。3～4 名いることもあります。各グループには決まったスタッフがあり、各スタッフはソルバング全体の中で仕事をしているという意識をもっています。この中で、異動することはもちろんあります。外出するときは、そのグループにさらにスタッフがつきます。入居者一人ひとり、行きたいところや食べたいものは違うので、「一般生活の日常と同じ」ということを一番尊重しています。

Q 4 : ここソルバングにも、ボランティアで来られる人がいるのでしょうか？

A 4 : 今のところあまりいません。旅行に行くときは、ボランティアが必要になってきます。

Q 5 : 日本ではこういう施設をつくる時、地域住民が反対するがここではどうですか？

A 5 : 新しく精神疾患や依存症の方のための施設をつくることは、地域の人たちにとっては嫌なことでしょう。被害が出る、地価が下がるなどが考えられるからでしょう。

医療費の節約も必要ですが、医療措置が早く終わり地域に戻ると、再発(再犯)が起きるのではないかと危機感を感じているということもあります。

## ★お部屋訪問

G 1 : 男性・1960 年生まれ・生まれたときから精神疾患です。国民学校は出ていますが、仕事や結婚はしていません。

私たちがおじゃまさせていただいたときは一人、部屋でくつろいでいました。お酒が大好きなのか、テーブルの上にはビールの缶がたくさん並べられていました。部屋の壁には、好きな絵や小物、ご自身の幼少のころの写真などが並べられていました。

G 45 : 男性。

この方の部屋には数多くの絵が飾られていました。趣味で描かれたということですが、まるで画家が描いたように上手でした。夏は外でできる趣味を楽しみ、絵は冬の間描くとおっしゃっていました。また、その方の部屋には大きな水槽があり、中ではとても気持ちよさそうに魚が泳いでいました。

## ★感想(「施設」思想から「住居」思想へ)

アンナさんの説明のとおり、そこにいらっしゃる方たちはまさしく「生活」を営み、最期のときまで自分の日々の暮らしを豊かに、少しでも楽しく過ごそうとしていることがわかりました。

「施設」から「住居」へ移行していく際、そこで生活する人、働く人たちのなかにきっと想像もつかないほどの葛藤や悩みがあったのではないのでしょうか。

「かたち」だけ変わって、「なかみ」が伴わないことほど厄介なものはないと考えてしまうとき、デンマークの福祉理念の確かさと柔軟さに感動するばかりでした。